

蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系⑨



図1 ヒバリ

上空や地上で盛んにさえずっている



図2 トビ

地上に降りてきたトビ



図3 ミサゴ

旋回しながら餌を探している



図4 ヒドリガモとコガモ

ほとんどが北へ渡り数少なくなったカモ類



図5 シギのなかま

渡りの中継地として春に日本を訪れる



図6 ツバメ

高速で飛び回り餌を探す



図7,8 アカモク

打ち上げられた海藻にはたくさんの生物が集まる



図11

中型の哺乳類と思われる骨



図12

食痕と見られる散乱する羽根



図9 端脚目



図10 端脚目



図13

砂に混ざる海洋プラスチックごみ



図14

植物の種子

カキ養殖用のパイプ(図13)と植物の種子と誤食の危険性があるレジンペレット (図14)

調査日 2026年4月21日 (土) 10:15~11:45

今月の調査では、留鳥であるヒバリ (図1)、トビ (図2)、ミサゴ (図3) はいつものように観察されたが、冬のあいだ個体数も種類も数多く見られていたカモ類は、ヒドリガモやコガモ (図4) が少数残っているだけであった。ほとんどの冬鳥は渡りを終えて姿を消し、渡りの中継地としてやってくるシギやチドリや、夏鳥の代表であるツバメの姿が少数見られた。これから更にこれらの種類が増え観察される顔ぶれも変わっていくと思われる。

打ち上げられていたアカモク (図7, 8) を探してみると半陸生のハマトビムシのなかま (図9) と水生のヨコエビのなかま (図10) と見られる端脚目の生物が見つかった。これらは水中の分解者であり、シギやチドリにとっては格好の餌になっていると考えられる。陸上の散乱した羽根 (図12) はハヤブサなどの猛禽類の食痕と考えられる。カキ養殖用のプラスチック製パイプ (図13) やレジンペレット (図14) はどちらも海洋プラスチックごみと呼ばれ海岸環境における大きな問題の一つとなっている。図14はレジンペレットと植物の種子が同所的に存在しており、陸上で種子を食べる鳥たちにとって誤食の危険性も心配される。

(伊藤勝彦)